# 太宰府の文化財 400

## 大宰府政庁南門

大宰府政庁跡は、古代、西海道（今の九州）を管轄し外交の窓口なども担い、朝廷と関わりの深い役所である大宰府の中枢施設だった場所です。政庁跡を正面（南側）から向かい、石段を上がっていくと最初に目にする礎石群があります。ここが、政庁の正面玄関にあたる「南門」の跡です。

地表面には、直径約70㎝の円形の柱座が造り出された礎石が計18基、東西方向に6基が南北に3列、整然と並んでいます。その規模は東西20・91m（桁間5間）、南北8・18m（梁間2間）で、面積を計算してみると170㎡余りと、門だけで現代の戸建住宅が1棟建てられるほどの広さです。柱と柱の間は、東西5間のうちの中央間だけが他と比べて約1・5倍広い5・7m。この部分が南門のメインの扉が位置したところです。

現在の南門跡（南東から撮影）
18本の総柱を支えた礎石のうちの12基が現存し、そのうち7基は元々の位置を保っています。

九州国立博物館4階展示室入り口前に展示されている大宰府政庁南門模型（九州国立博物館画像提供）

現在地表に見える礎石の上にはどのような建物があったのでしょうか。復原にあたっては、古代建築研究の第一線の研究者たちが関わりました。使われている礎石が巨大であることから重量のある大きな建物と想定でき、屋根が二重となる重層構造と推定されています。また屋根は、発掘調査で確認された基壇（きだん）の規模から、雨落ちが基壇の外側にくるような、四方に軒の出がある入母屋（いりもや）形式とされました。こうして、時代が近い建築物である平等院鳳凰堂などを参考に、重層の入母屋屋根の壮麗な五間三戸門（5間のうち中央3間が出入口となる門）で復原されています。建築されていた当時としては先進的な大陸風の建物で、都とこの大宰府にしかなく、他の地方官衙（役所）とは大きく一線を画していたと言えます。この門を古代官人たちや外国からの使節などが通ったことを想像してみますと、時を越えて今もこの礎石がこの場所にあることには言い様のない感慨深さがあります。現地では※日本遺産関連アプリを使って、お持ちのスマートフォンやタブレットで大宰府政庁の往時の姿をご覧いただけます。ぜひ、西の都を体感してみてください。

※アプリは〔VR 日本遺産 古代日本の「西の都」大宰府〕でご検索ください。

文化財課　遠藤　茜

アプリを使って現地で見ることができるVR画像

### 「まるごと太宰府歴史展」開催中！

今から50年前の昭和43（1968）年秋、政庁跡で鍬入れ式が行われ、約1年をかけて特別史跡大宰府跡での最初の計画的な発掘調査が、福岡県教育委員会によって行われました（大宰府史跡第1次調査）。現在、太宰府市文化ふれあい館（国分四丁目9番11号）で開催中の「まるごと太宰府歴史展」では、旧石器時代から近現代までの太宰府の通史展示とともに、大宰府発掘50年をテーマに関連資料の展示を行っています。この機会にぜひご覧ください。（入館無料、会期は11月3日まで）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。